

# くさびら

泉鏡太郎

青空文庫



御馳走には季春がまだ早いはやが、たゞ見るだけなら何時いつでも構かまはない。食料しょくれうに成なる成ならないは別べつとして、今頃いまごろの梅雨つゆには種さま／＼／＼の茸きのこがによき／＼と野山のやまに生はえる。

野山のやまに、によき／＼、と言いつて、あの形かたちを想おもふと、何なんとなく滑お稽どけてきこえて、大分だいぶ安あん直ちよくに扱あつかふやうだけれども、飛とんでもない事こと、あれでなか／＼凄味すごみがある。

先年せんねん、麴町かうぢまちの土手三番町どてさんばんぢやうの堀端寄ほりばたよりに住すんだ借家しやくやは、太ひどい濕氣しけで、遁出にげだすやうに引越ひっこした事ことがある。一いつ體たい三間みまばかりの棟割長屋むねわりながやに、八疊はちでふも、京間きやうまで廣々ひろ／＼として、柱はしらに唐からく草彫さぼりの釘くぎかくしなどがあらうと言いふ、書院しよあんづくりの一ひと座敷ざしき

を、無理に附着けて、屋賃をお邸なみにしたのであるから、天

井は高いが、床は低い。——大掃除の時に、床板を剥すと、

下は水溜に成つて居て、溢れたのがちよろくと蜘蛛手に走

つたのだから可恐い。此の邸……いや此の座敷へ茸が出た。

生えた……などと尋常な事は言ふまい。「出た」とおぼけ

らしく話したい。五月雨のしとくとする時分、家内が朝の間、

掃除をする時、縁のあたりで氣が着くと、疊のへりを横縦にす

つと一列に並んで、小さい雨垂に足の生えたやうなものの群

り出たのを、懲にしては寸法が長し、と横に透すと、まあ、怪

しからない、悉く茸であつた。細い針ほどの侏儒が、一つ

く、と、歩行き出しさうな氣勢がある。吃驚して、煮湯で雑

ふきん 巾を絞つて、よく拭つて、先づ退治た。が、暮方の掃除に視  
 ると、同じやうに、ずらりと並んで揃つて出て居た。此が茸なれ  
 ばこそ、目もまはさずに、じつと堪へて私には話さずに祕して居  
 た。わたくし おくびやう  
 私 が 臆 病 だ から である。  
 なに 何しろ梅雨あけ早々に其家は引越した。が、……私 はあとで  
 聞いて身ぶるひした。むかしは加州山中の温泉宿に、住居の  
 おほろり 大圍爐裡に、灰の中から、笠のかこみ 一尺ばかりの眞黒な  
 きのこさんほん 茸が三本づゝ、續けて五日も生えた、と言ふのが、手近な三  
 うきだん 州奇談に出て居る。家族は一統、加持よ祈禱よ、と青くなつ  
 て騒いだが、私に似ない其主人、膽が据つて聊かも騒がない。  
 きのこ 茸だから生えると言つて、むしつては捨て、むしつては捨てたの

で、やがて妖は留んで、一家に何事の觸りもなかつた——鐵心銷怪。偉い！……と其の編者は賞めて居る。私は笑はれても仕方がない。成程、其の八疊に轉寢をすると、とろりとすると下腹がチクリと疼んだ。針のやうな茸が洒落に突いたのであらうと思つて、もう一度身ぶるひすると同時に、何うやら其の茸が、一づゝ芥子ほどの目を剥いて、ペろりと舌を出して、店賃の安値いのを嘲笑つて居たやうで、少々癩だが、しかし可笑い。可笑いが、氣味が悪い。

能の狂言に「茸」がある。——山家あたりに住むものが、邸中、座敷まで大な茸が幾つともなく出て祟るのに困じて、おほみねかつらぎ城を渡つた知音の山伏を頼んで來ると、「それ、山

まぶし  
 伏ふしと言いつば山やま伏ふしなり、何なんと殊しゆ勝しょうなか。「と先まづ威ゐ張ばつて、  
 ときん  
 兜かたむ巾をを傾かたむけ、いらたかの數じゆ珠ずを揉もみに揉もんで、祈いのるほどに、祈いのる  
 ほどに、祈いのれば祈いのるほど、大おほな茸きのこの、あれおもく思おもひなしか、目め鼻はな  
 てあし  
 手足あしのやうなものの見みえるのが、おびたゞしく出でて、したゝか仇あだ  
 をなし、引ひ着きつて惱なやませる。「いで、此この上うへは、茄なす子の印いんを結むすん  
 で掛かけ、いろはにほへとと祈いのるならば、などか奇特きせきのなかるべき、  
 などか、ちりぬるをわかんなれ。」と祈いのる時とき、傘かさを半はんびらきにし  
 た、中なかにも毒どく々くしい魔ま形ぎやうなのが、二にの松まつへ這はつて出でる。此これに  
 ぎよつとしながら、いま一ひと祈いのり祈いのりかけると、その茸きのこ、傘かさを開ひら  
 いてスツクと立たち、躍をどりかゝつて、「ゆるせ、」と逃にげまはる山やま  
 伏しを、「取とつて嚙かまう、取とつて嚙かまう。」と脅おびすのである。――

―彼等を輕んずる人間に對して、茸のために氣を吐いたものである。臆病な癖に私はすきだ。

そこで茸の扮装は、縞の着附、括袴、腰帶、脚絆で、見徳、嘯吹、上髯の面を被る。その傘の逸もつが、鬼頭巾で武悪の面ださうである。岩茸、灰茸、鳶茸、坊主茸の類であらう。いづれも、塗笠、檜笠、菅笠、坊主笠を被つて出ると言ふ。……此の狂言はまだ見ないが、古寺の廣室の雨、孤屋の霧のたそがれを舞臺にして、ずらりと此の形で並んだら、並んだだけで、おもしろからう。……中に、紅絹の切に、白い顔の目ばかり出して、棲折笠の姿がある。紅茸らしい。あの露を帯びた色は、幽に光をさへ放つて、たとへば、妖

女の艶えんがある。庭にはに植うえたいくらゐに思おもふ。食たべるのぢやあな  
いから——茸きのこよ、取とつて噛かむなよ、取とつて噛かむなよ、……

大正十二年六月



# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# くさびら

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>